

平野健君の正解

板見潤一

千葉高同期の平野健君が逝去された由、あの精悍な彼も倒れたか…と惜しまれる。緑中の一年時、松井幹夫先生のクラスで一緒だった彼については、今も鮮やかな記憶が蘇って来る。知的で決然とした態度は爽やかであった。中一なれば幾分小柄ながら、バスケット部だというその凛とした姿勢はクラスでも際立っていた。拙ブログの「同窓の日々」から本サイトに以前転載して頂いた中に一度記したのだが、彼の秀才ぶりを示すエピソードなので此処に再録し、あらためて追悼の言葉としたい。

担任の松井先生の理科の授業で、こんな質問が出された。「50度の湯と100度の熱湯がある。混ぜたら何度になるか？」窓際の列から順に当てられ、75度という返答が続く中、既に二三列が立ち尽くした後、平野君が「50度と100度の間」と正答した。

先生曰く「私は各々がどれだけの分量であるかを言わなかった。ものごとには条件というものがある。条件を有耶無耶にして勝手な憶測で判断してはいけない。」

数式を覚えるだけのお勉強ではなく科学的態度というものを示されたのだと思う。

平野君の答えに松井先生は大きく頷き、満足気であった。

高校になってもバスケットを続けた彼とは一緒のクラスになることもなく、以後接触はなかったのだが、60年前のそんな一瞬の映像が、今でもくっきりと残っている。アルバムから当時のクラス写真を抜き出して彼の冥福を祈ることにする。他の細部に至る記憶は、本サイト常連で同じ松井クラス同級だった嶋田君に譲ることにしよう。

2023/09/01



左から筆者、嶋田正文君、平野健君（千葉市立緑町中学校1年）